

主な内容

特集—— 岩手看護短期大学と
岩手医科大学医療専門学校 歯科技工学科の歩み

トピックス— 最終講義が行われました

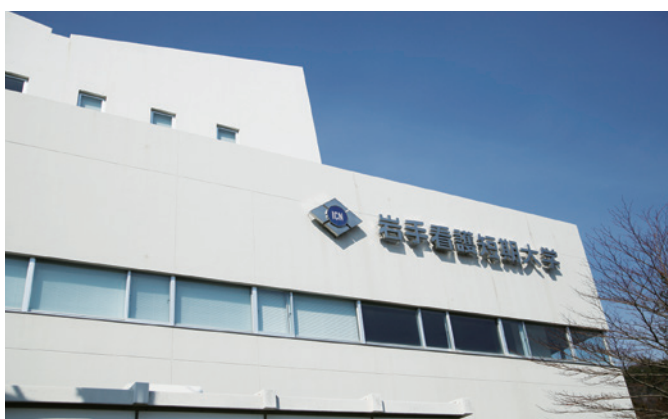
表紙写真：岩手看護短期大学校舎(上)と
岩手医科大学医療専門学校上ノ橋校舎(下)



岩手看護短期大学と 岩手医科大学医療専門学校 歯科技工学科の歩み

令和2年3月をもって閉学となる岩手看護短期大学と閉科となる岩手医科大学医療専門学校の歯科技工学科。多くの医療人を輩出し、地域医療に貢献してきました。本稿では、両校が節目を迎えるにあたり、これまでの歩みを振り返ります。

■ 岩手看護短期大学



◆ 概要

所在地 岩手県滝沢市大釜千が窪 14-1
学 長 祖父江 憲治 (岩手医科大学長と併任)

設置学科

- ・看護学科 (定員 60 名)
- ・専攻科 地域看護学専攻 (定員 20 名)
- ・専攻科 助産学専攻 (定員 15 名)

※看護学科は 2016 (平成 28) 年度入学生をもって、専攻科は 2019 (令和元) 年度入学生をもって学生募集を停止

建学の精神 “人間愛と奉仕の心”

この精神は、岩手医科大学の学則にもある「誠の人間」の育成を目標にした創立者・初代理事長である三田俊次郎の精神を反映したのものとなっており、学校法人 岩手女子奨学会第三代理事長・三田明子が提唱したものです。



教育理念

1. 豊かな教養と誠と信とに徹する人格の陶冶
2. 高度の専門知識と技術の修得
3. 人類愛に基づいて社会の福祉・保健医療に寄与し得る人材の育成

◆ 沿革

女子教育への着実な継承

三田俊次郎は、1920 (大正 9) 年に東北高等女学校が廃止されたのを受けて、翌年、盛岡実科高等女学校を創設しました。日本婦人の美点を発揮することを主眼に、三田俊次郎の妻・てるを校長に女子教育は進められました。

1921 (大正 10) 年	三田俊次郎が設立者校主となり岩手公園下の元作人館中学校舎跡に三田てるを校長とする盛岡実科高等女学校創設
1923 (大正 12) 年	盛岡女子技芸学校開設 (普通科・高等科・専攻科 各1年で定員 150名)
1927 (昭和 2) 年	盛岡実科高等女学校を岩手高等女学校と改称 (本科修業年限 4 年、定員 200 名) (実科修業年限 3 年、定員 150 名) 財団法人岩手女子奨学会申請 認可 初代理事長 三田俊次郎 就任
1941 (昭和 16) 年	「専攻科」併置の認可 (修業年限 2 年、定員 40 名) 当時の高等女学校のうち専攻科併置校は 20 校であった
1943 (昭和 18) 年	第二代理事長 三田俊定 就任
1944 (昭和 19) 年	盛岡女子技芸学校を廃止
1947 (昭和 22) 年	学制改革により岩手女子中学校設置
1948 (昭和 23) 年	学制改革により岩手高等女学校を廃止 岩手女子高等学校設置
1951 (昭和 26) 年	学制改革により財団法人岩手女子奨学会は学校法人岩手女子奨学会となる
1965 (昭和 40) 年	岩手女子高等学校に衛生看護科新設
1968 (昭和 43) 年	岩手女子中学校を廃止
1984 (昭和 59) 年	岩手女子高等学校に衛生看護専攻科新設

看護職者育成への実現

第二代理事長・三田俊定の意志を受け継ぎ、第三代理事長・三田明子により、東北初の私立看護短期大学として滝沢村（現滝沢市）に本学が設立されました。

1989(平成元)年12月 岩手女子看護短期大学設置認可
 1990(平成2)年1月 本館竣工
 4月 岩手女子看護短期大学開学(看護学科、定員60名)
 初代学長 小松代融一 就任
 10月 学歌制定
 1991(平成3)年4月 学章制定
 1993(平成5)年4月 第二代学長 矢川寛一 就任
 9月 2号館(体育館・情報科学演習室)竣工
 1995(平成7)年8月 テニスコート設備 学内LAN敷設
 1996(平成8)年2月 第三代理事長 三田明子 就任
 1997(平成9)年10月 3号館(専攻科棟)竣工
 1998(平成10)年4月 専攻科開設
 (地域看護学専攻、定員20名)
 (助産学専攻、定員15名)
 1999(平成11)年4月 第三代学長 小川英行 就任
 2000(平成12)年4月 岩手看護短期大学に学名変更
 男女共学となる
 11月 開学10周年記念式典挙

2001(平成13)年12月 第四代理事長 澤野桂子 就任
 2005(平成17)年4月 地域看護学専攻
 (大学評価・学位授与機構認定)
 2006(平成18)年1月 4号館(レクチャーホール・e-ライブラリー)竣工
 4月 助産学専攻
 (大学評価・学位授与機構認定)
 2010(平成22)年5月 開学20周年記念式典挙行
 2011(平成23)年3月 財団法人短期大学基準協会
 第三者評価適格認定
 2014(平成26)年4月 第四代学長 三田光男 就任
 2015(平成27)年4月 特例適用専攻科認定
 2016(平成28)年4月 学校法人岩手女子奨学会より、学校法人岩手医科大学へ設置者変更となる。
 学長 祖父江憲治 就任
 (岩手医科大学学長と併任)
 看護学科の学生募集停止
 2017(平成29)年4月 岩手看護短期大学閉学
 2020(令和2)年3月

学歌の制定

学歌は、初代学長の小松代融一が作詞、本県の音楽教育の基礎を築いた鷹薮洋一氏が作曲を担当し、1990(平成2)年10月に制定されました。

岩手看護短期大学歌

一、みちのくのまなかの国の岩手山
 いや高く裾なびきたる滝沢に
 礎固く創りいでし学び舎

二、諸人の痛み苦しみ鎮めんと
 手をとりて集えるわれらと子どもに
 看とりの学を広く深く究めん

三、ああ
 千が窪の丘にかげろう立ちて
 雫石の川波せせらぎ謳う
 とことわに栄えよわれらが学び舎

学章の制定

岩手・青森両県の大半を占めた旧南部藩領の藩主が用いた紋章、武田菱を背景に人の心を写すものとして古代鏡を配し、その中に本学英語名(Iwate College of Nursing)の頭文字をおいたものです。これまで本学では、看護学科27回生、専攻科22回生まで卒業、修了生を送り出し、2,688名が県内外で看護師、保健師、助産師として活躍しています。



法人移管開学式

2016(平成28)年4月2日(土)、岩手看護短期大学レクチャーホールにおいて、法人移管に伴う開学式が行われ、在学生、教職員、本法人関係者らが出席し、岩手看護短期大学の新たな門出を祝しました。式では、岩手看護短期大学の継承として、学校法人岩手女子奨学会の澤野理事長から小川理事長へ、学旗が手渡されました。(写真:岩手看護短期大学旗の継承)

岩手看護短期大学を運営された学校法人岩手女子奨学会は、学校法人岩手医科大学の学祖である三田俊次郎によって創立され、両法人は今日まで密接な協力関係を保ちながら長い歴史を重ねてきたことから、経営母体の移管が実現しました。そして、この移管により更なる教育環境の発展が期待されるとともに、岩手看護短期大学を母体とした4年制看護学部が岩手医科大学に新設されました。2020(令和2)年、その看護学部は完成年度を迎えます。岩手看護短期大学の使命は看護学部を引き継がれ、新たな一步を踏み出すこととなります。



◆ 概要

所在地 岩手県盛岡市上ノ橋1-12
 校長 三浦 廣行(岩手医科大学副学長・歯学部長と併任)

設置学科

- ・ 歯科衛生学科(定員40名)
 - ・ 歯科技工学科(定員25名)
- ※歯科技工学科は2018(平成30)年度入学生をもって学生募集を停止

教育理念

地域社会に貢献できる歯科衛生士、歯科技工士の養成

◆ 沿革

歯科医療の充実と地域福祉への貢献を目指して「岩手歯科技工士学校」誕生

東北・北海道に歯科医師養成機関が皆無であったため、当時の社会的要請を受けて、岩手医科大学は1965(昭和40)年に歯学部を開設しました。歯科医師の増加に合わせて歯科技工士の養成も必要であることから、歯科医療の充実と地域の福祉に貢献するため、岩手医科大学歯学部の設置の翌年に岩手歯科技工士学校が設立されました。

■ 法人・大学関係

- 1897(明治30)年4月 私立岩手病院開設(開設者 三田俊次郎)
- 1928(昭和3)年2月 財団法人岩手医学専門学校設立認可
- 1947(昭和22)年6月 財団法人岩手医科大学に組織変更
- 1948(昭和23)年4月 岩手医科大学医学部医学科開設
- 1965(昭和40)年4月 岩手医科大学歯学部・教養部開設
- 2007(平成19)年4月 岩手医科大学薬学部開設
- 2017(平成29)年4月 岩手医科大学看護学部開設

■ 医療専門学校関係

- 1966(昭和41)年4月 岩手歯科技工士学校開設
- 1967(昭和42)年4月 学校教育法に基づき岩手歯科技工士学校に各種学校の認可
- 1976(昭和51)年4月 岩手歯科技工士学校を岩手歯科技工専門学校に校名変更
- 1986(昭和61)年10月 岩手歯科技工専門学校創立20周年記念式典挙行
- 1995(平成7)年1月 岩手歯科技工専門学校専門課程修了者に専門士の称号付与認可
- 1996(平成8)年4月 文部大臣指定の歯科技工士学校として指定替え承認

- 9月 岩手歯科技工専門学校創立30周年記念式典挙行
- 2003(平成15)年3月 岩手県立衛生学院歯科衛生学科の移管に係る覚書を岩手県と締結
- 9月 岩手医科大学歯科衛生専門学校設置認可(岩手県知事)
- 2004(平成16)年4月 歯科衛生士学校指定(文部科学大臣)
- 岩手医科大学歯科衛生専門学校開校、岩手歯科技工専門学校を岩手医科大学歯科技工専門学校に校名変更
- 2011(平成23)年4月 岩手医科大学医療専門学校と改称(岩手医科大学歯科衛生専門学校と岩手医科大学歯科技工専門学校を統合、岩手医科大学医療専門学校歯科衛生学科ならびに同歯科技工学科設置)
- 2015(平成27)年4月 歯科技工学科を内丸から上ノ橋に移転
- 2018(平成30)年4月 歯科技工学科の学生募集停止
- 2020(令和2)年3月 歯科技工学科を閉科

岩手歯科技工士学校から岩手歯科技工専門学校へ

1976(昭和51)年には学校教育法の一部改正により、従来の各種学校から専修学校への昇格が認可され、岩手歯科技工専門学校へと学校名が変更されました。

また、開設10周年を記念し、校章、校旗、校歌が制定されました。校章は本学医学部解剖学第一講座(当時)の菅原圭三技術員がスズランの花に歯を図案化したものです。校歌は、1967(昭和42)年に土井晩翠賞を受賞した岩泉晶夫氏が作詞を、多数作曲の実績がある本県中学校教諭の村田健氏が作曲を担当しました。

岩手歯科技工専門学校校旗



岩手歯科技工専門学校校歌

一、不來方に
 小鳥鳴く
 朝霧立ちて
 中津の川原

二、雲は湧く
 岩鷲に遙か
 花の香あふれ

明日をこそ
 拓かんものと
 集いよる我等

光り浴び
 輝く瞳
 築かんものと

技工の道
 歩みゆく我等

匂い立つ
 腕清かに

技工の道
 築かんものと

岩手歯科技工専門学校創立30周年記念式典

1996（平成8）年9月岩手歯科技工専門学校の創立30周年記念式典が来賓、卒業生、在校生、学校関係者の出席のもと盛大に挙行されました。



岩手県立衛生学院歯科衛生学科の本法人への移管

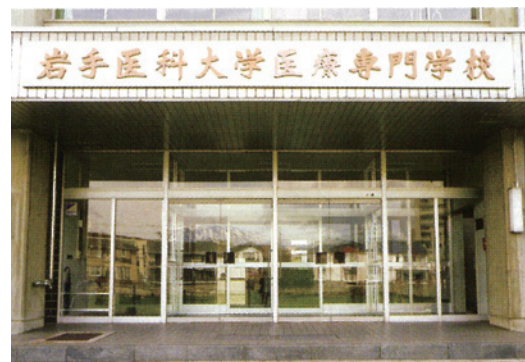
本法人は岩手県からの県立衛生学院歯科衛生学科の移管要請を受け、これを承諾しました。これにより1964（昭和39）年4月に創設された同学科は、2003（平成15）年に本法人に経営移管の覚書が交わされ、2004（平成16）年4月に3年制の岩手医科大学歯科衛生専門学校として開校されました。

また、岩手医科大学歯科衛生専門学校の開校に合わせて、2004（平成16）年4月に岩手歯科技工専門学校は岩手医科大学歯科技工専門学校へと校名が変更されました。

岩手医科大学医療専門学校の誕生

2011（平成23）年には歯科衛生専門学校と歯科技工専門学校を統合し、現在の岩手医科大学医療専門学校となりました。統合に至る経緯は、歯科技工専門学校と歯科衛生専門学校の収支改善を図るために組織的な改善が必要であったことと、今後の各種医療技術者養成に対応する必要性について検討した結果、統合して運用することが本法人理事会で決議されました。

岩手医科大学医療専門学校の門出にあたり、三浦廣行校長は岩手医科大学報Vol.417（2011（平成23）年6月号）の巻頭言において「両校のこれまで培ってきた実績をベースに、今回の統合を飛躍のチャンスにとらえ、岩手医科大学という組織の中だからこそ可能な新しいコデンタルスタッフの養成機関としての充実を図って行きたい」とコメントを寄せました。



上ノ橋校舎 校名揮毫：大堀勉前理事長

岩手医科大学医療専門学校 歯科技工学科閉科に関する記者会見

岩手医科大学医療専門学校 歯科技工学科は、1966（昭和41）年に岩手歯科技工士学校として歯科技工士の養成を開始し、これまで1,000名を超える卒業生を病院や診療所に輩出してきました。しかし、今般の歯科技工所への集約化やデジタル化など時代的背景もあり、2011（平成23）年度以降定員割れが続いたことから、専門学校として歯科技工士を養成する時代は終了したと判断し、2019（平成31）年度入試から学生募集を停止することとなりました。

（写真：2017（平成29）年10月24日の記者会見の様子、当日は附属花巻温泉病院の閉院についても発表されました）



2017（平成29）年、本法人理事会において、2019（平成31）年4月に歯科技工学科へ入学する学生の募集を停止し、それ以降同学科の入学募集はしないことが決定されました。同学科は、地域社会に貢献できる歯科技工士の養成を教育理念に掲げ、1966（昭和41）年に岩手歯科技工士学校として設立されました。1976（昭和51）年に岩手歯科技工専門学校、2004（平成16）年に岩手医科大学歯科技工専門学校へと校名を変更し、2011（平成23）年に岩手医科大学歯科衛生専門学校と統合し、現在に至っています。卒業生の対応は、これまでどおり岩手医科大学医療専門学校が行うこととなります。

今後、岩手医科大学医療専門学校は歯科衛生学科を有する単科の専門学校として、地域社会に貢献できる有意な歯科衛生士の養成に取り組んでいきます。

シドニー大学教授らが岩手県こころのケアセンターを視察されるため来学されました

2月5日（水）、オーストラリア発祥で心の応急処置プログラムであるメンタルヘルス・ファーストエイド（MHFA）に熱心に取り組まれているシドニー大学薬学部のチェン教授ら3名が、日本におけるMHFAの地域や被災地での取り組みの視察のため、オーストラリア連邦政府外務貿易省の豪日交流基金を通じオーストラリア連邦政府の助成を受け、日本のMHFAの代表を務める大塚教授の訪問を目的として来学しました。

当日は大塚教授による日本でのMHFAの取り組み状況、東日本大震災発災後の活動や、本県における精神保健活動の紹介の他、地域のサロン活動で実践されている集団回想法というセラピーのデモンストレーションが行われました。

また、岩手県こころのケアセンターのスタッフに加えて、岩手県障がい保健福祉課山口担当課長、山崎主査、岩手県精神保健福祉センター小泉所長、本学附属病院薬剤部工藤部長、米澤薬剤長らも参加し、チェン教授らと意見交換を行いました。

オーストラリアでは今般大規模な山火事および豪雨等が発生し、大きな被害を受けており、災害後のこころのケアにも関心が高く、被災地でのMHFAの取り組みや岩手県こころのケアセンターの活動にも関心を示され、日本とオーストラリアの取り組みの貴重な情報共有の場となりました。



大塚教授とディスカッションするチェン教授（右端）ら



チェン教授（左端）らと集団回想法のデモンストレーション

高校生がんセミナーが開催されました

2月11日（火）、マルチメディア教育研究棟において、高校生がんセミナーが開催され、県内の高校1・2年生40名が参加しました。

この催しは高校生を対象に「がん」についての基本的な教育を行い疾患への理解を深めるとともに、予防や将来のがん検診受診を促し、医療者育成に寄与することを目的に行われました。

当日は、がんセンターの伊藤センター長による挨拶の後、緩和医療学科の木村特任教授、病理診断学講座の上杉講師、放射線腫瘍学科の及川特任講師、薬剤部の小野寺薬剤師、看護部の竹内看護師による基礎講義が行われました。午後はシミュレーターを用いた内視鏡手術や内視鏡検査体験、鶏肉を使ったエネルギーデバイス体験、全身麻酔管理体験、病理診断体験、がんのワークショップなどが行われ、参加した高校生は、普段目にする事のない医療の現場に関心を高めた様子でした。



内視鏡の手術体験



全身麻酔管理体験（写真右は医学教育学講座の相澤特任講師）



がんのワークショップ

令和元年度岩手県DPAT研修会で 岩手医科大学DPATが講師を務めました

2月16日（日）、岩手県主催のDPAT*研修会に岩手医科大学DPAT（岩手DPAT統括の神経精神科学講座大塚教授、岩手DPAT先遣隊の精神科病棟辛主任看護師、災害・地域精神医学講座小泉特命講師、同講座赤平特命助教）が講師を務めました。研修会には、県内の精神科病院および精神保健福祉センター、こころのケアセンター職員など計27名が参加しました。午前の県地域防災計画等の体制（岩手県総合防災室）や岩手DPATの運営（障がい保健福祉課）、災害医療概論やDPATの役割等（DPAT統括・先遣隊）についての講義後、午後からは、実際の活動拠点本部と避難所を想定し、DPAT統括および先遣隊、岩手県精神保健福祉センター職員らがファシリテーターとなり模擬演習が行われました。

演習では、岩手県沖地震が発生した想定で行われ、活動拠点本部演習では、本部設置、被災状況の情報収集、DPAT隊の受け入れ、DPAT調整本部や現場DPATとの情報伝達を実際に行い、避難所演習では避難所対応と活動拠点本部との情報伝達を行いました。参加者からは、実際の災害を想定した演習で、災害時のイメージができた、災害時の情報伝達の難しさ、避難所でのかわり方について学ぶことができたとの感想がありました。

*DPAT：Disaster Psychiatric Assistance Team
（災害派遣精神医療チーム）



DPAT先遣隊による講義およびデモンストレーション



DPAT活動拠点本部の模擬演習

岩手県交通株式会社による本学附属病院への 電気バス乗り入れセレモニーが行われました

2月20日（木）、附属病院正面のバス停留所において、岩手県交通株式会社の電気バスが本学附属病院に乗り入れることを記念したセレモニーが行われました。

当日は、小川理事長の他、岩手県交通の本田会長、高橋矢巾町長らが参列しました。小川理事長からは「本学附属病院は東日本大震災を教訓とした、災害時でも病院機能を100%維持できる災害に強い病院だ。そこに災害時でも運行できる電気バスが乗り入れることは、患者サービス向上につながり大変喜ばしく思う。岩手県交通の一層の活躍を祈念する」と祝辞が述べられました。

なお、本学附属病院を經由する電気バスは、北高田線と矢巾医大線において、1日各1回ずつ運行されます。



電気バスを出迎える参列者（中央が小川理事長）

最終講義が行われました

2月27日（木）、大堀記念講堂において、3月末をもって定年退職される医学部病理学講座機能病態学分野の増田友之教授により「ITの進歩と共に歩んだ病理学・肝臓病理」と題した最終講義が行われました。

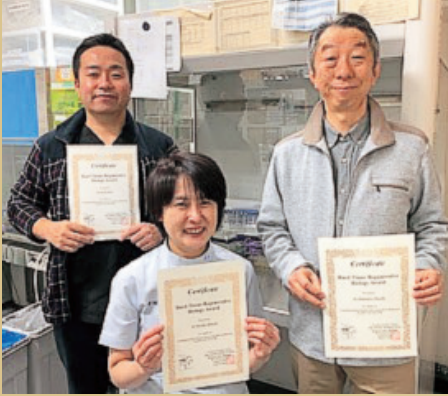
本学教職員をはじめ、名誉教授や卒業生など多数の関係者が出席し、増田教授によるスライドや在職中のエピソードなどを交えた熱心な講義に耳を傾け、名残を惜しみました。講義終了後には、職員と大学院生から増田教授に花束が贈呈され、惜しめない拍手が送られました。



花束の贈呈を受ける増田教授



口腔保健育成学講座 小児歯科学・障害者歯科学分野の菊池 和子 講師、解剖学講座 発生生物・再生医学分野の原田 英光 教授、大津 圭史 准教授が硬組織再生生物学会賞を受賞しました



(左から：大津准教授、菊池講師、原田教授)

この度、硬組織再生生物学会賞を受賞し、第28回 硬組織再生生物学会学術大会・総会（令和元年8月24日 札幌国際ビルで開催）において、学会賞受賞記念講演を行いました。受賞した論文はCraniofacial bone regeneration using iPS cell-derived neural crest like cells (iPS細胞由来神経堤細胞を用いた頭蓋骨再生), Kikuchi et al., Journal of Hard Tissue Biology, 27 (1) 1-8, 2018です。

現在、骨の損傷や欠損に対して幹細胞を用いた効率的かつ効果的な骨再生法の開発が望まれています。本研究では、我々が世界に先駆けて開発したiPS細胞由来神経堤細胞が、頭蓋骨の再生に有用な細胞ソースとなることを示しました。今後は本研究成果をヒト臨床応用へと展開すべく、さらなる研究を続けていきたいと思っています。受賞にあたり、ご指導ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

(文責：口腔保健育成学講座 小児歯科学・障害者歯科学分野 講師 菊池 和子)

医学部3年生の高橋 空さん、寺田 明輝さん、佐藤 祐真さん、園部 和樹さんが日本循環器学会東北地方会において、優秀賞を受賞しました

令和元年12月7日、仙台で開催された第169回日本循環器学会東北地方会で、医学部3年生が研究室配属の研究テーマで、学生研修医セッションで優秀賞を受賞しました。

彼らの研究テーマは、「急性大動脈解離の予後に性差は影響するか？—当院での急性大動脈解離の検討—」で、これまでほとんど報告がない急性大動脈解離の性差を明らかにしたものです。セッションは、抄録の事前審査を受けた演題10演題以上から、一次審査を通過した5演題で口演発表が行われました。この中でトップ3が表彰され、本学学生が受賞を果たしました。発表後の審査員からの評判でも、「本当に3年生なのか」と驚きの反響があり、高い評価をいただくことができました。本学学生以外の受賞者は、2名とも他施設の研修医でした。配属期間を超えて遅い時間まで研究をつづけた成果が形になって、彼らも万感の思いがあったようです。最後になりましたが、学生の演題発表にあたり、ご協力いただきましたご父兄のみなさま、ご助言・多大な援助をいただきました内科学講座（循環器内科分野）森野禎浩教授・当講座秘書の方々にも謝意を申し上げます。

(文責：医学教育学講座 地域医療学分野/内科学講座 循環器内科分野 教授 伊藤 智範)



(左から：佐藤 祐真さん、高橋 空さん、寺田 明輝さん、園部 和樹さん)

理事会報告 (1月定例—1月27日開催)

1. 名誉教授の称号授与について

増田 友之 (病理学講座機能病態学分野教授)

(称号授与年月日 2020年4月1日付)

2. 役職者の選任について

副学長 (岩手県こころのケアセンター・発鑑学担当) 酒井 明夫 (再任)

副学長 (歯学部改革担当) 三浦 廣行 (再任)

歯学部長 三浦 廣行 (再任)

看護学部長 嶋森 好子 (再任)

(任期 酒井副学長は、2020年4月1日から2年間、

三浦副学長、歯学部長、看護学部長は、同日から1年間)

3. 教員の人事について

統合基礎講座医療工学講座 准教授

澤田 智史 (前 同講座 講師)

(発令年月日 2020年2月1日付)

4. 職員の人事について

法人事務部 部長

山本 和博 (現 法人事務部 次長 (企画担当))

病院事務部 部長

遠藤 利明 (現 法人事務部 次長 (財務担当))

法人事務部 次長 (総務担当)

寺舘 武志 (現 法人事務部 総務課長)

法人事務部 次長 (財務担当)

影山 雄太 (現 法人事務部 経理課長)

(発令年月日 2020年4月1日付)

新任教授の紹介

令和2年1月1日就任

医歯薬総合研究所 生体情報解析部門

清水 厚志 (しみず あつし)

昭和46年7月17日
神奈川県川崎市出身



研究テーマ

- ゲノム・エピゲノム情報を用いた疾患発症リスク予測法の開発、ゲノムコホート研究

主な著書論文

- ヒトゲノムの最初の配列決定と解析 (Nature 2001; 409: 860-921.)
- 国内コホート・バイオバンクの生体試料収集プロトコルの違いによる DNA メチル化状態の差の補正手法の開発 (PLoS ONE 2016; 11: e0147519.)
- 脳梗塞の遺伝的体質：多遺伝子リスク評価 (Stroke 2017; 48: 253-258.)

趣味

フェンシング、弾丸旅行

教職員への自己PR

このたび医歯薬総合研究所生体情報解析部門の教授を拝命いたしました。私はこれまでヒトのゲノムやオミックス情報と疾患に関する研究を情報解析の立場から行ってまいりました。岩手医科大学に着任後は、いわて東北メディカル・メガバンク機構の一員として被災地でコホート研究のリクルートにも参加し、基礎、臨床の先生方と連携してゲノムコホート研究を進めてまいりました。今後も学内外の先生方と連携し、岩手県から全国に個別化予防研究を広めていきたいと考えております。皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

経歴

平成11年 青山学院大学大学院 理工学研究科 博士後期課程 修了
平成11年 慶應義塾大学医学部分子生物学教室 研究員、特別研究助手、助手、助教、専任講師、准教授
平成25年3月 岩手医科大学いわて東北メディカル・メガバンク機構 生体情報解析部門 特命教授
令和2年1月 現職

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰 佐藤真結美
影山 雄太 菊池 初子
松政 正俊 工藤 正樹
齋野 朝幸 及川 弘美
藤本 康之 安保 淳一
白石 博久 佐々木 忠司
成田 欣弥 畠山 正充
遊田由希子 藤村 尚子
佐藤 仁 武藤千恵子
小坂 未来 高橋 慶
藤澤 美穂

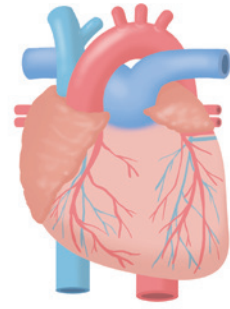
編集後記

岩手看護短期大学が開学した頃は、看護の高等教育化の黎明期。短大開学は岩手の看護に大きな発展をもたらしました。高校時代の友人は、当時狭き門だった歯科技工士を目指していたっけ。高度化する医療や時代の変遷に応じて、看護学は大学教育へ、歯科技工士養成はその役目を終えられますが、岩手の看護や歯科を牽引してこられた諸先生方や卒業生の「進み来たりし道」(校歌)を大切に、学び舎は違えどその想いを継承していきたいものです。それぞれに想いを抱いた春はもうすぐです。

(編集委員 遊田 由希子)

岩手医科大学報 第522号

発行年月日 令和2年3月31日
発行 学校法人岩手医科大学
編集委員長 小川 彰
編集 岩手医科大学報編集委員会
事務局 法人事務部 総務課
TEL. 019-651-5111 (内線5452、5453)
FAX. 019-907-2448
E-mail: kouhou@j.iwate-med.ac.jp
印刷 河北印刷株式会社
盛岡市本町通2-8-7
TEL. 019-623-4256
E-mail: office@kahoku-ipm.jp



心臓血管外科学講座 特任講師 小泉 淳一

低侵襲心臓手術 (Minimally invasive cardiac surgery, MICS)

近年、循環器疾患の分野には治療の低侵襲化の波が押し寄せています。大動脈弁狭窄症や僧帽弁閉鎖不全症に対し、開胸や人工心肺を用いずに、経カテーテル的に大動脈弁人工弁を植え込むTranscatheter aortic valve implantation (TAVI) 手術や、僧帽弁の逆流病変をつかんで押さえ込んでしまうMitral Clip手術は当院循環器内科においてすでに導入され実績が積み重ねられています。また小児科（成人では循環器内科）では心房中隔欠損症に対する経カテーテル的閉鎖術が行われています。

とはいえ、開心術（開胸下に人工心肺、心停止を用いた心内修復手術）が必要なくなるわけではありません。病変の形態や心内合併病変の有無、患者さんの年齢や他臓器合併症などのリスク評価によっては開心術の方が望ましい場合も多くあります。

従来、弁膜症や先天性心疾患に対する開心術はほとんどが胸骨正中切開で行われてきました（図A）。近年、患者さんの負担軽減や手術痕の美容的観点を考慮して低侵襲心臓手術（MICS）が行われるようになってきています。MICSは皮膚切開を小さくして胸骨を全て切らずに部分的に切ったり、胸骨は全く切らずに右肋間小開胸で心臓に到達したりする方法です（写真B、C）。術野が小さいため胸腔鏡の助けを借りたり、通常は心臓に取り付ける人工心肺を首（内頸静脈）や足の付け根（総大腿動静脈）の血管を利用して装着したりする必要があり、やや難易度が上がりますが、出血量や術後疼痛が少なくなるなど

の利点が知られています。現在、当院で対象となる手術術式は大動脈弁人工弁置換術、僧帽弁形成術、心房中隔欠損閉鎖術などです。

我々岩手医科大学心臓血管外科学講座は、患者さんのより高いQOL（生活の質）を目指し、手術時間の短縮や出血量の軽減、手術の出来栄を追求することはもちろんのこと、MICSを含めた低侵襲手術に積極的に取り組んでいきたいと考えております。

図A：通常の胸骨正中切開

図A

写真B：低侵襲心臓手術（MICS）による僧帽弁形成術後の手術痕

写真C：低侵襲心臓手術（MICS）による大動脈弁置換術後の手術痕



後段：辻専門研修医、滝浪助教、田林助教、大崎医局員、齋藤専門研修医
前段：坪井助教、金教授、筆者、満永医局員